

## 高校生による演劇公演「ハムレット」 12月に配役オーディションと集中稽古を実施



セリフについて細かく指導する笹部博司さん

3月23日(土)、24日(日)にキャスパホールで「高校生による演劇公演『ハムレット』」が開催されます。参加するのは県高等学校演劇研究会西播支部に所属する賢明女子学院、

琴丘、飾磨、自由ヶ丘、龍野、姫路北、姫路工業、姫路飾西、姫路東、姫路南の演劇部および演劇同好会のメンバー35名で、うち15名は照明や演出助手、制作などの裏方を担当します。12月22日・23日に実施したオーディションで20名の配役が決定し、翌24日から5日間にわたって集中稽古が行われました。

ハムレット役に選ばれた琴丘高2年の藤井陽菜さんは「愛の在り方や人間関係の複雑さなど、いろいろなことをセリフから学んでいます。周りを巻き込んでいく役柄なので、エネルギーを撒き散らしながら演じたい」。オフィーリアを演じる姫路飾西高2年の尾橋春香さんは「まさかヒロインに選ばれ

ると思わなかった。オフィーリアがわたしでよかったと、仲間にも観客のみなさんにも思ってもらえるよう、精一杯努力します」と話しています。

構成台本と演出は第1回「お気に召すまま」、第2回「関西弁マクベス」に続き姫路市出身の演劇プロデューサー・笹部博司さんが担当。「『ハムレット』は恋、復讐、決闘など見せ場の連続で、エンターテインメントの極み。人気演目ゆえにさまざまな解釈や分析がなされているけれど、本来はこうであったらという、書かれた当時に立ち戻るようなかたちでお届けしたい」と抱負を語ります。また、ハムレットやオフィーリア、旅役者が歌う劇中歌をはじめ、すべての劇中曲を宮川彬良さんが作曲しているのもみどころのひとつ。波乱万丈かつ華やかな娯楽活劇を、ぜひお楽しみください。

※チケットは好評発売中。詳細は巻末の「事業あんない」をご覧ください。



集中稽古では劇中歌のレッスンも

問キャスパホール ☎079-284-5806



岡村延栄「羽衣」(部分)

## 書写の里・美術工芸館で 新春特別展示「姫路押絵」展が開催中

押絵とは、厚紙に綿をのせて絹などの布でくるんだ小さなパーツを組み立てて、人物や花、鳥の形などを表現する布細工です。中でも姫路押絵は他地域の押絵に比べて厚みがあり、しかも人物の顔ならばガラス玉を目に嵌め込むなど、リアルで起伏豊かな表現が特徴だと言われています。

この姫路押絵の創始者が、今年で生誕150年を迎える宮澤由雄(明治2年～昭和19年)です。宮澤は幕末から明治頃に流行した「のぞきからくり」(箱の中にしかけたナカネタ絵を穴からのぞく大型紙芝居のようなもの)のナカネタ絵と客寄せの看板絵を押絵で制作。この押絵は臨場感豊かで爆発的な人気を博し、「大日本 押絵師 宮澤由雄」だけの表記で海外からの手紙が受け取れるほどの知名度を誇っていました。

こうした宮澤流の押絵の技法は、宮澤の子どもたち、石田鶴子、宮澤貞次、岡村延栄らに受け継がれていきました。

例えば石田鶴子(明治22年～昭和37年)は、額「慈母観音

像」など、名画を下敷きにした芸術性あふれる作品を制作。皇室の方々にも高く評価されました。

また、弟の宮澤貞次(明治29年～昭和41年)は父由雄とともに播磨国総社の三ツ山大祭や一ツ山大祭の「置き山」や「造り物」の制作にも携わった人形師も兼ねた押絵師でした。

末娘の岡村延栄(明治44年～平成8年)は、結婚前から家業の姫路押絵を手伝っていましたが、戦後、継承者がいなくなるのを見て58才から再びこの道に入り、羽子板などの制作に当たりました。

今回の展示では押絵の羽子板や額、下絵、道具など約120点を出品。「姫路押絵の技術的な高さ、その技術が連綿と継承されてきたことを知っていただけたら」と岡崎美穂学芸員は話しています。

※詳細は7ページをご覧ください。



石田鶴子「唐子遊び牡丹・宝船」(個人蔵)

問書写の里・美術工芸館 ☎079-267-0301